

.....

トリベルスキー先生へ名誉博士称号授与

目次：

トリベルスキー先生へ名誉博士称号授与	1
時間学アフタヌーンセミナー in 福岡 開催報告	2
RITS Special Seminar 開催報告	2
サイエンスアゴラ 2016 出展報告	3
時間学特別講演会 開催報告	3
時間学特別セミナー 開催報告	4
書籍出版のお知らせ	4
時間学ミニ辞典	4

.....

時間学をより豊かなものとすることを目指して、時間学研究所は諸外国の研究者と連携した研究を推進しています。今年度は 3 名の外国人研究者を招聘して共同研究を行っています。その一人であるミカエル・アイザック・トリベルスキー先生（モスクワ大学・教授）に対し、本年 11 月 1 日、山口大学は名誉博士称号を授与しました。

トリベルスキー先生はモスクワ大学で博士学位を取得した数理物理学の著名な研究者です。平成 26 年度には時間学研究所に 2 ヶ月間滞在し、研究セミナー、特別講義、英語講義録「RITS Lecture Notes Vol.1 Lecture Notes in Physics LINEAR AND NONLINEAR EVOLUTION IN TIME AND SPACE」の出版、外国人研究者の紹介・推薦、モスクワ大学との学術交流協定の締結など、時間学研究所の活動として多くの実績を残されました。その後も引き続き時間学の発展および山口大学の国際化に対して多くの貢献をされており、本年 10 月にモスクワで開催された第 6 回日露学長会議に岡学長が出席した際にも、モスクワ大学視察の案内をされるなど大学間の交流にも尽力されています。今回の名誉博士称号授与は、これら一連の業績をたたえるものです。

授与式では、岡学長がトリベルスキー先生の業績とその意義の紹介をされ、称号が授与されました。トリベルスキー先生は挨拶で、20 年以上に



わたり多くの日本人研究者と研究交流を行ってきたこと、また今後、山口大学とモスクワ大学の交流がより一層深まることの期待を述べられました。「私は日本が好きです」と率直におっしゃったトリベルスキー先生の人柄のにじみ出る

挨拶に、多くの出席者が共感したことと思います。

今回のトリベルスキー先生への博士称号授与をきっかけとして、また、この成功した国際的な学術交流を規範として、今後も多くの学術交流が進むこと、そして時間学の研究が発展することを期待したいと思います。



時間学研究所ニュースレター
2016 年度第 2 号をお届け
します。

《時間学研究所》
〒753-8511
山口市吉田 1677-1
TEL/FAX : 083-933-5848
jikann@yamaguchi-u.ac.jp
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



時間学アフタヌーンセミナーin 福岡 「アンモナイトの死骸は浮くか沈むか」を開催

時間学研究所の研究の使命の一つに、時間学の社会への還元があります。これまでも各種講演会や公開講座、セミナーなどによって、多くの方に時間学に触れてもらう機会を作ってきました。

そのような事業の一つとして2014年から毎年1回、福岡市天神のアクロス福岡で「アフタヌーンセミナーin 福岡」という市民向け講演会を行っています。今年は11月11日（金）、講師に九州大学・教授の前田晴良先生（古生物学）をお迎えして『アンモナイトの死骸は浮くか沈むか？』というテーマで開催しました。前田先生は世界各地で古生物、とくにアンモナイト類の発掘調査・研究を行われてきた方で、現在は九州大学総合研究博物館に所属であり、日本古生物学会の会長を務められています。講演では、生きた化石と言われるオウムガイとの比較を通じて、アンモナイトが死んで遺骸となった時から数時間のうちに起きることを見事に推理されました。数千万年前のある日の数時間の出来事を知るといって、まるで現場検証を行う警察の鑑識のような目線で語られる講演で、またフィールドワークの楽しさと大変さを織り交ぜて語られる前田先生の話術とも相まって、聴衆をとりこにしたようです。講演後は質問が相次ぎ、なかには自分で見つけた化石を持って来て前田先生に「鑑定」をしてもらった方までいました。化石を題材にしてはるか昔の出来事を見つめるという、時間学にとっても大変素晴らしい講演会であったと言えるでしょう。ところで講演のタイトル、『アンモナイトの死骸は浮くか沈むか？』ですが、実際はどうだったのでしょうか？ 前田先生の答えは、化石として見つかる保存状態の良いものは、死後ただちに海底に沈んだものであろう、というものでした。



前田晴良先生

RITS Special Seminar 開催

11月4日、時間学研究所が招聘した3名の外国人研究者と、理学部の鍛冶静雄准教授により、時間学特別セミナーが開催されました。

このセミナーは数理科学をテーマにしたもので、タイトルは『RITS Special Seminar – International Workshop on Mathematics and its Applications』です。講演者は鍛冶准教授のほか、11月1日に名誉博士称号を授与されたトリベルスキー先生（モスクワ大学・教授）、トゥールーズ第1大学・教授のジェローム・ボルト先生（平成28年10月20日～11月16日招聘）、昨年9月から一年間本研究所に准教授として滞在されたティシュチェンコ先生（モスクワ大学・准教授）で、使用言語は英語です。内容は、数理物理学的手法の経済学への応用、数理的な最適化の様々な応用、エルディシュ問題の一つ、そして変形の数理と、多岐にわたり、参加者の研究心を刺激する優れたセミナーだったと言えます。また、時間学研究所から始まった国際学術交流が自然な共同研究へと展開した好例にもなりました。



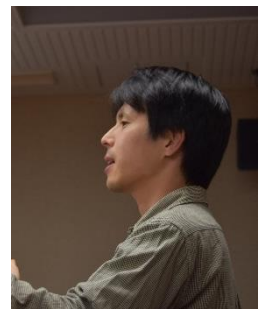
トリベルスキー先生



ボルト先生



ティシュチェンコ先生

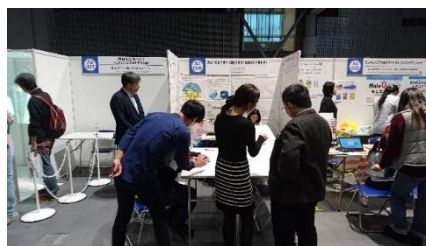


鍛冶准教授

サイエンスアゴラ 2016 に出展

2016年11月3日から6日の4日間、日本科学未来館にて科学技術振興機構主催の「サイエンスアゴラ2016」が開催され、時間学研究所の明石真教授および学生が出展しました。「あなたの体内時計は夜型？朝型？質問表で簡単判定！」というテーマで、体内時計についての説明をはじめ、朝型か夜型かの判定、時間管理尺度などの判定も行いました。来場者の方々は、自分の生活を客観的に判断することができ、非常に喜んでくださいました。ブースへは500人程度お越しいただき、大盛況のうちに終わりを迎えることができました。

(レポート:理学部4年 時間生物学研究室
十川麗美・久保侑紀)



時間学特別講演会 「不可避の破局と共存する一時折起きる超巨大災害」を開催

2016年11月19日、山口大学学生会館大ホールにて時間学特別講演会「不可避の破局と共存する一時折起きる超巨大災害」を開催しました。この講演会は山大理学部との共催で、始めに世話人である坂口有人教授(山大・理学部)から講演会の趣旨が説明され、大橋聖和講師(山大・理学部)による「2016年熊本地震はなぜ起こったのか？～地質学的視点から～」、そして小説「死都日本」の著者・石黒耀先生から「統一国家日本を生んだ阿蘇地変」と題した講演がありました。

近年、日本列島では地震や火山噴火が頻発し、被害が絶えません。大橋先生の講演では、熊本地震に



大橋聖和講師

よって地表にあらわれた地震断層には、過去に繰り返り起こった地震の記録が残されていること、その記録の解析によって大きな被害を出す地震の周期(頻度)がわかることなどが紹介されました。その中で過去数十万年という地質学的時間の中では、地震を起こした原因が変化することもあり、原因の変化とともに地震の規模も変わる可能性が示されました。石黒先生は火山噴火と神話との関係を講演されました。人類は誕生以来火山の恵みを受けてきました。しかし、時折とんでもない仕打ち

を火山から受けることもあります。こうした受難の記録は伝承や神話という形で記録されていると、石黒先生は指摘されました。そして、1万年以上前に起こった阿蘇山の噴火災害記録が古事記や日本書紀に書かれているということを様々な角度から検証し、日本建国の物語は自然災害と密接につながっているとの考えを示しました。

今回の講演会では、災害の発生間隔という時間軸を通して、数千年に一度起こる超巨大災害の記録をどのように読み取り、語り伝え、そして被害を最小限に抑えるかといった問題にそれぞれの専門的立場から話していただきました。会場からは「今後さらに大きな自然災害を被ることは避けられないのか？」という趣旨の質問があり、講師からは「不可避であることを認識して防災意識を高めることが重要」との返答がありました。予定時間ぎりぎりまで質疑応答があり、会場は盛況のうちに閉じました。



石黒耀先生

時間学特別セミナー「物語と時間」を開催

去る平成 28 年 11 月 22 日、吉田キャンパス総合研究棟・フォーラムスペースにて時間学特別セミナー「物語と時間」を開催しました。現在、研究所が進めているシリーズ書籍の刊行企画（『時間学の構築』）と連動したセミナーで、森野正弘教授（時間学研究所・兼任所員／人文学部）、青山拓央准教授（時間学研究所）のコーディネートのもと、学外の寄稿予定者をお招きし「物語と時間」というテーマでお話いただきました。藤澤健太所長の開会挨拶のあと、青山所員の司会のもと会は進められました。「演劇的」（高橋大助先生 國學院大学・教授）、「時間の何が物語りえないのか」（平井靖史先生 福岡大学・教授）、「物語・行為・出来事」（山口尚先生 京都大学・非常勤講師）、「地域をつくる物語とその時間」（松浦雄介先生 熊本大学・教授）と、〈物語〉の時間性あるいは〈時間〉の物語性にまつわる多彩で領域横断的な知見と視点が展開され、参集した聴衆は熱心に聞き入っていました。



高橋大助先生



平井靖史先生



山口尚先生



松浦雄介先生

書籍出版のお知らせ

『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』

（太田出版）青山拓央著
古典から現代までの哲学、諸科学や諸人文学、そして音楽や小説やプロ将棋などの知見を通じて、「幸福とは何か」「いかにして幸福になるか」「なぜ幸福になるべきか」の三つの問いが論じられています。読みやすく書かれた本ですが、専門家にとっても有益な議論が含まれ、時間と幸福の関係については第二章・第四章でおもに検討されています。2016年9月の刊行以来、毎日新聞、読売新聞、共同通信の各書評にて紹介されました。



『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』

『時間と自由意志：自由は存在するか』

（筑摩書房）青山拓央著

「未来の可能性の一つを自ら選ぶ」という意味での自由。そうした自由を人間が本当にもっているのかどうかは、哲学・科学上の大きな問題です。本書ではこの問題を取り上げ、従来の説明図式にとらわれないかたちで「自由」の新たな理解を探ります。博士学位論文（慶應義塾大学受理）を加筆のうえ書籍化したものですが、専門分野の異なる方にも読んで頂くことができるよう、工夫が試みられています。



結びつけ問題 Binding Problem

目の前に赤い車が走っていたとします。私たちは赤い車が走っているなどそれを目で見ることができます。一方、この見るという行為には脳内の神経系の活動が随伴します。これまでの研究から脳内では様々な機能が局在していると考えられています。機能の局在というのは、脳内では場所ごとに異なる働きの神経が存在しているということです。例えば、色に関わる神経とものの動きに関わる神経は脳内の別々の場所に存在します。さらに厄介なことにそれぞれの神経の活動タイミングは異なります。つまり、物理的な世界ではひとつの事物であっても脳内では時間的にも空間的にも別々の情報として分かれてしまうのです。けれども、当然ながら私たちは色と車の動きがばらばらに見えたりはしません。もし見えるという主観的な体験がそれらの神経の活動の結果生じたものであるのならば、何らかの方法でとりまとめが行われているはずで、工学的な機器のようにクロックが脳内に存在していれば話はわかり易いのですが、今のところ脳内にそのような同期に用いられるクロック相当の働きはみつかっていません。そのため、とりまとめの仕組みはいまだよくわかっていません。時空間的に分散した情報を結びつけるという意味合いでこの問題は結びつけ問題あるいは binding problem と呼ばれます。

（寺尾将彦）